



第39回 日産 童話と絵本のグランプリ

あたしは本をよまない コウタリ リン

教室はうるさい箱だ。その中で転校生の木田くんはいつもひとり、しずかな・みたいになつていっている。

「授業をはじめます」

きょうの五時間目は、図書室でかりた本の感想文を発表する。

あたしは本を読むことが好きじゃない。だから、うんと字の少ない本をかりた。

でも、その本を見て、お母さんは「まだこんな一年生みたいな本、読んでんの？」とつまらなそうな顔をした。「あのなユイちゃん、もつとちゃんとした本を読まんと、みんなにおいていけるよ」

本なんか、読んでも読まなくてもいいしよ。お母さんなんか、なんにも知らないくせに。思い出すと、おなかのふちがあつくなる。

「じゃあ、次は木田さん」と森先生にあてられて、木田くんは感想文を読みはじめた。

「ぼくはこのあいだ、はじめて図書室で本をかりました」

アナウンサーみたいなしやべり方するんだ。木田くんの顔を見ようとしたけれど、あたしのせきからは、木田くんのはねた毛と右の耳のうしろしか見えなかった。

「なんでもいいやと思つてとつた本を森先生にわたすと、小学生なのに『哲学』の本を読むなんてすごいのかな？と思ひました。だってぼくはまだその本を読んではいません」

草野くんが「木田あ、長いわあー」と大声で言った。感想文はまだぜんぜん長くない。だれかが「声でかすぎ」とつぶやく。いつもうるさい草野くんが、あたしはにがてだ。

下校のときも、ぼくは本を持つてただけなのに、知らないおじいさんがりっぱだねとほめてくれました。家でも、お母さんが本を見て、すごいと言ひました」

あたしは下をむいていた顔をぱつと上げた。それそれ、それだ。読まなく

ても、持つてただけでほめられる本。木田くんがかりたその本をあたしもかりて、お母さんの目の前においてみる。そして、ユイちゃんすごいねと言われよう。

そうじのはんがかわった。木田くんと同じになつた。チャンス、と思つたら「木田と山本がおるわー」と大きな声がする。草野くんまで同じはんだった。がつくり。いやいや、がつくりなんかしていられない。あたしは木田くんに話しかけるんだ。

木田くんは朝、チャイムがなるころにやつて来る。わすれものはない。ノートはちゃんと書く。休み時間にはとてもむつかしそうな紙をおつている。そしていつもひとり。

はあーつとためいきをつく。・みたいな子に話しかけるだけなのに、どうしてこんなにぎんちようするんだらう。

あしたのそうじは外かいだん。教室から遠くて、先生も見まわりに来ない。みんなてきとうにやつたらすぐ遊びに行つてしまう。でも木田くんはそうじ

時間がおわるまでいるだらう。ふたりきりになれる。そこで話しかけてみよう。でも、なんて話しかける？

次の日のそうじの時間、竹ぼうきをほつぱりだして、草野くんはすごいなかつた。

「あのー、木田くんは東京から来たん？」

木田くんがゆつくりこつちをむいた。自分が話しかけられたことをうたがつてみたい。

「ほら、木田くんの話し方、あたしらとちがうし、えつと——」

「東京じゃない。よこはま」

それだけ言うと、また竹ぼうきをぎんぎんと動かす。失敗した。話はおわつてしまったと思つたら、そうじやなかつた。

「いいよね、ひっこししない人」

「へ？」

「ほいく園がいつしよだった友だちとか、家の近い友だちとかがいて」

「……そうでもないで。そういう友だちに、いきなりなまはずれにされたりするし。あたしは、友だちなんか、もう

いらんわ」

木田くんがおどろいた顔であたしを見る。

「ほんでな、しやべる人がいなくなつて、あたし発見した。教室はうるさい箱やつて」

木田くんの顔がぱつと明るくなつた。

「そうだね。教室つてうるさい箱だ」

「いちばんうるさいのは、草野くんやけど」

「草野くんはいい人だよ」

「こんどはあたしがおどろいた。」

「なんで？ なんでそう思うん？」

「草野くんは、ほかの人にするとおなじようにぼくにもふざけてくる。むししない」

「そういえば、あたしもちゃんと山本と名前によばれてる。」

木田くんがちりとりに葉っぱを集めはじめた。言わなくちゃ。いま、言わなくちゃ。

「あの、木田くんが持つてただけでほめられた本、教えてくれへん？ あたしもお母さんにほめられてみたいねん」

うんうんうんうんと、なんともうな
ずいた。木田くんの竹ぼうきをうばい
とり、草野くんがなげすてた一本もひ
ろって自分の竹ぼうきといつしよにかか
える。あたしは「かたづけとくから！」
と走りだした。

「うまくいかなかったの？」

図書室で、木田くんにきかれた。

「あのでっかい『哲学』の本、お母さん
から見えるようにテーブルにおいたらな
そんなむつかしそうな本、どうせ読ま
んと返すだけやろ、つて言われた」

ほめられるどころか、バレバレだった。

「じゃあ、読めばいいんじゃない？」

あたしは木田くんをキツとにらむ。

「やだ。木田くんは読んだんやから、
木田くんが教えて」

「しょうがないなあ。あのね、哲学つて
いうのはもともとギリシャ語なんだ。
愛智っていう意味」

「あいちっ？」

「知ってわかることが大すきってことかな」

「ふーん。なにを知ってわかるの？」

「それも自分で考えて、ずーつと自分

の頭で考える。こたえがあるかわから
なくても、考えつづける」

考えてまた考える？ なにそれ？

こんがらがっていたら、入り口あたり

がさわがしい。

「おー木田と山本。なんかおもしろいこ
とあったん？」

草野くんが、なぜ図書室に？

「山本さんと哲学の話をしてたんだ」

「へー。オレも入れてくれや」

「いいよ。ね、山本さん」

どうしたらいいのかわからなくて、へ
らつとわらう。あれ？ もしかして、

草野くんもいつもひとりのしずかな・
なのか？ いや、うるさい・か。

それから、木田くんと草野くんとあ
たしの三人で、図書室に集まるように
なった。草野くんのサッカーの話をき
いたり（二年生なのに四年生のチーム
にえらばれた）、木田くんにおり紙を
教えてもらったり（きょうりゆうをお
るのがとくい）、おもしろいきゆうしよく
ベスト3を決めたり（いちばんは、ぷり
ぷりちゅうかいのため）。

その日、草野くんは先生によびださ
れていた。しかられるのかなあとと思っ
ていたら、あまくておいしいものをいっ
ぱい食べたみたい顔をして草野くん
が図書室にきた。

「オレの感想文、賞とつたぞー」

すごいすごいと、木田くんは自分の
ことみたいによくこんでいる。

「どんな本の感想文？」

これ、と見せてくれたのは地図記号
の本だった。なんだかむつかしそう。

あたしは、うへつと言ってしまった。

「なんや、うへつて。山本もごちやご
ちや言わんと読めよ。ええぞお、地図
記号」

ぐつとへんじにつまった。木田くんと
草野くんがじーつとあたしを見ている。

「あたしは……」

木田くんの心配そうな顔。草野くん
のおもしろがつてる顔。あーもう！

「あたしは、本を読まへんけど、本を
書く！」

「わはははは」

ふたりはおんなじわらい声をあげた。

「そんな、わらわんでもいいやんか」

「ぼくがいちばんききに読むね」と木田
くん。

「オレ、感想文書いたるわ」と草野くん。

「ふたりとも、やくそくやで」

「そつちもな。ちゃんと本書けよ」

木田くんと草野くんが帰ったあと、

あたしはひとり図書室にのこった。ふた
りがいなくなると、むねのおくがすんつ
と小さくなる感じがした。こんなこと
ははじめてだった。どうしてだろう。

なんだかとても気になる。

「これが知ってわからたいっていうこと
なんやろか？ 木田くんが言うてた哲
学なんやろか？ ずーつと考えたらえ
えんやろか？」

図書室の本たちは、だまってあたし
のひとりごとを聞いている。

「へんなやくそく、してしもたなあ」

本を書くなんて言っただけ、なにを書
いたらいいのかさっぱりわからなかった。

草野くんがおいていった地図記号の
本をばらばらめくる。・が三つくつづい
た記号があった。「∴ 史跡 名勝
天然記念物」

あたしと木田くんと草野くんみたい

に見えた。前はばらばらの・だったけ
ど、いまはこんなふうに集まっている。
そうだ、あたしの本は木田くんと草野
くんとあたしのむねのおくのことを書く。
ふたりはどんな顔で読んでくれるだ
ろう。

コウタリ リン

京都府

受賞のことは

本を読まずにいられない私から「本を
よまない」と言いはる人がでてくるなん
て。このお話が書けたことも、大賞を
いただいたことも、予期せぬできごと
でした。よろこびをかみしめています。

受賞歴 第27回・第30回・第35回
日産 童話と絵本のグランプリ 佳作
第36回・第38回
日産 童話と絵本のグランプリ 優秀賞

審査員コメント

原稿用紙10枚の枠の中で、三人の
キャラクターを魅力的に描き分けたの
がお見事。ストーリーの流れも破綻が
なく、気持ちのいいラストが用意され
ています。ただ、「あたしは本を書く！」
の宣言がやや唐突な印象なので、伏線
がひとつ張ってあれば完璧でした。

吉橋 通夫